

今さらに Bh 派に属するスートラ三種の出版・翻譯によつて恵まれた。このようにして重要な欠陥は次々に補われ、研究はいよいよ総合的段階にはいつたと言ひ得る。この要求にこたえる集大成、カーシカル博士ならびに R. N. Dandekar 教授の Śrautakośa の出版が、順調に進捗していることは研究者の意を強くする。しかし文献学的祭式研究のなすべきことはなお多い。カーシカル博士が今後ますます斯学の進歩に貢献されんことを切望する。

(The Śrauta, Paitrmedhika and Parisēsa Sūtras of Bharadvāja. Critically edited and translated by C. G. Kashikar. Part I: Text, XCVI, 372 pp.; Part II: Translation, 526 pp.; Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, Poona, 1964.)

長沢和俊著

## チベット 極奥アジアの歴史と文化

山 口 瑞 鳳

或る国について総括的な記述を試みようとするとき、その国以外の人々によつて書かれた見聞記の類のみを手がかりにして事を論じてはなかなか正鵠は期しがたい。今、自分が取

上げようとする問題を、その国の人々が嘗てどのように見て来たか、現在どのように見ているかということを知らなくては議論が奇妙な方向に発展する危険がある。亦、然るべくしてあることと偶発的なことがらとを区別するにも、その国の人々がその事実を認知しているか否かを知らなくてはならない。

行きずりの旅行者の記録にはもとより、かなり長く滞在した人々の間にでも、その国の人々が当の問題に対して示した見解などを顧みない場合、屢々群言に語られた象の印象の如きものが述べられているのが認められる。

旅行者の記録などを素材として、これらの取捨選択を成可く誤らないためには、その国の人々によつて書かれた各種の文献に出来るだけ多く接し、自らその国の総体について一般より正確な概念をもつことが必要である。出来れば、その国に長く滞在してそれらのことを確かめる機会をもつことが望ましい。その他の場合、少くとも、その国についての学問的な研究成果を参照する努力を怠つてはならない。

素材を選択するに必要な準備を欠いて、単に素材を適当に按配して示すことは、誤つた見解も右から左へ伝えられる危険が多いため、決して願わしいことと云えないであらう。

長沢氏の「チベット」は、非常にたくみにチベットに関する事柄を按配し、読み易く便利な書物にまとめあげたもので

ある。この種の書物は久しく世に出ていないので一般の要望にこたえるところが大きいと思われるが、著者がいうように、チベット学の入門書として且つ斯学の発展に寄与せんとするにはどうかと思われる節が多いので、多少吟味して見たい。

先づ、長沢氏はチベットの如何なるものに関しても著者としての独自の考え方を示していない。全体が引用と借用の堆積で、原著者の様々な立場を交錯するにまかせているとは思えない。

引用文を細字で示し、普通字体で本文を綴りながら、本分そのものうちにも引用ならぬ借用を重ねているのは残念である。巻末に著者は次のように断つてゐる。

「本書の作成には左の諸書を引用したが、文中には煩わしいので、細部にわたつては一々断わらなかつたところもある。ここに総括的に感謝の意を表する次第である。」

# (二九二)

しかし、右のようなことわり書きで済ますには文中の借用(引用ではない)箇所がごく短く、且つ頻繁に繰り返されるような場合に限られるのが普通でないだろうか。

実際には、数行にわたる借用を本文のいたるところに挿入しながらそのことを明示してないのは、重大な手落ちと思われる。

最も著しい多田等観「チベット」からの借用箇所を参考迄に左に示して見よう。括弧内の数字は長沢氏の書物の頁を示す。

二三頁(七四)、六頁(七四)、一〇頁(七六―七七)、  
一一二頁(七七)、三二―四頁(七八) 一四―一五  
頁(七八)、一六頁(七八―七九)、一七頁(七九)、一八頁  
(八〇)、四六―四七頁(八二)、四七―四八頁(八一―八  
二)、二九―三〇頁(八二)、三五頁(八二―八三)、三七  
―三八頁(八三)、三一―三三頁(八三)、三四頁(八三)、  
四九―五一頁(八四)、五二―五三頁(八五)、五五頁(八  
五―八六)、五六―五八頁(八六)、五七―五八頁(八七)、  
九八頁(八七)

右の他にもとびとびの借用箇所が見受けれるが、参考迄に指摘するにはこれで充分であろう。尤も借用された箇所が原文そのままではないが、誰が見ても直ちに原文をそこにあてはめることができる。例えば、「西藏曆」が「チベット曆」となっている程度の違いがある。

著者は「東西諸学者の研究成果を平易に要約した。」(九)という。成程、古代史に関しては佐藤長氏の研究成果なども要約してあるようであるが、*pyi dar* (後期仏教伝播)以降の記述には、*Ch. Ball* の「西藏の喇嘛教」*Maraini* 《*Sacreds Tibet*》等の割合にまともつたむしろ一般向けの書物

を安易に利用した節が多く、巻末に挙げた参考図書の中の学術的なもの、特に欧文のものを参照する労を省いた形跡があらわである。

亦、各種辞典の該当項目を典拠を確かめず利用した様子も視われる。従つて、前後の記述に矛盾と重複があり、学術的な著作のうちに修正されたものも、誤つたまま取り上げている。

著者があと一息の労を吝まず、学術的な成果をとり入れて各種の記述を分析し、著者独自の見解に基づいてこれらを綜合したものを示して呉れたら、或は、斯学に貢献するところもあつたろうと思われるので残念に思われる。

以上の発言を裏づけるため、習慣にしたがつて以下に問題点を拾つて見よう。

著者は、利用した書物毎にチベット語の発音を示すカタカナの使い方に相違があつたのにもかかわらず、慣例に反して、これらを統一していない。勿論、原語をそれから推定した跡もない。亦、今日、チベット語をローマ字で示す表記法にもいくつかの方法があるが、著者はこの点も顧慮せず、同一頁内にチベットの三つの史書を紹介しながら、一つ毎に違つた三通りの表記法を使用している。(九三)勿論、これは表記法の相違を説明するためにしたわけではない。

記事の重複は、或る場合には避けられないこともあつた

ろうが、せめて重複した内容に矛盾がないか、乃至はそれがあつた場合も必要な説明を加える配慮をしてもよかつたのにならうか。

例えば、bSam yas に於けるシナ・インド両系仏教の論争を「ラサに於ける仏教論争」(一二八—一二九)として紹介しているが、これは先ずよいとしても、同じことがらについて、別のところ(七四)で、

「……中国仏教が相当の勢力を有していたが、パドマサンプハヴァに論破され……」

とも示し、論争の關係者をカマラシーラからパドマサンプハヴァに変えている。

後の記事は誤りで、パドマサンプハヴァはこの論争には關係がない。

亦、チベットの宗派に関して述べたところも、一二五頁から一二三八頁迄はそのままでもよいとしても、同じことについて、七七頁で示したものは全く違つた叙述になつている。

『「ニンマワ派」インドから入蔵した名僧アチシャの開いた宗派で、世界で最も完全な仏典を有するという。この一派は民間でなかなか有力である。』

とある。「ニンマワ」の説明では「民間で有力」とする最後の一節以外は、出典は何か知らないが、全くの出鱈目としか云えない。

因みに述べるなら、Atica は九八二年或は九七二年に生れ、Viklamagitia の長老で、一〇四一年頃、チベット西部 m'Nah ris に至り、一〇五四年、ラッサの南西、m'Ns than の Na mo che で歿した。その間、色々なチベットの祖師と接したが、カーダムパ bkah gdans pa を開基した ħBrom ston rGyal bahi ħbyun gnas を正統な後継者とした。「ニンマワ」は Khri sron lde btsan (742—779) 時代に来藏した Padmasambhava を祖師とし、シナ系の仏教の流れも含む教義を擁するが、十一世紀以降に開宗された諸派に対して n'Nin na ba、即ち古派と称せられたもので、これらと対立こそすれ、同一のものではない。「世界で最も完全な仏典を有する。」とは、一体、何のことが察することとも出来ない。

長沢氏は二つ以上の著作を利用して、合せて一文にまとめた時犯した誤りに次のようながある。

八六頁——ここは殆んど多田等観「チベット」一色に拠つて原文をそのまま利用している——には、

「六月三十日—七月八日」シヨドゥン……この期間には、政府主催の観劇会が催される。六月三十日はレポンス寺、七月—十四日はノルプリンカ宮殿、七月五—八日はポタラ宮殿前で、各々仏教説話やチベット古史にもとづいた演劇が催される。その仮面や服装は民族学上好個の

資料である。」

と、多田「チベット」に含まれない記述を挿入している。ところが、この項は、多田「チベット」から取つた「八月一日—七日」カキナエ云々と実は重複している。著者の誤を訂正しながら、これを説明して見よう。

カキナエのサンスクリットは Kathināstaraka, Kathināstaraka、チベット語では sra brkryan bin ba、夏安居 varsika, dbyar gnas 終了、即ち解夏の休みを云う。チベットでは、この解夏の休みに、お祭りをする。これを shu ston、又はなまつて sho ston ショトウンという。後者の綴り字から、ヨーグルトの祭と解されたりするが、俗説であろう。解夏の記念に三大寺の僧徒にダライ・ラマが謁見を賜う。レブン、ħBras spuus の僧には七月三十日に、セラ、Se ra の衆には一日遅れて八月一日にこれをゆるす。ガнден dGah ldan は少し遠いところにあるので、小モンラム tshogs mchod への参加が終つた後の三月一日にこれを行う。

ダライ・ラマは shu ston が終つた後、ノルブ・リンカ Nor bu glin kha、chab bshegs に出かける。chab bshegs とは、ピクニックのことで、水辺に気ばらしの住いをとれるの意である。ダライ・ラマ五世・六世（十七世紀）の伝記などには、このとき、大きいテントを張つて、同行する人々

のそれらとて立派なテント村が出来たとある。この間、ノルブ・リンカ Nor bu gñi kha では、有名な A che lha mo (職業的劇団)の徒によつて各種の演劇が催され、天覧にも供せられる。これには簡単な面 hbag は用いられるが、民俗学者の喜ぶ仮面の踊り、チャム chham のそれとは別のものである。後者は年末に僧によつて行はれるもので頭全部を覆い、ヨーロッパのカニバルなどで見られるものと似ている。その他、印度系の舞踊 gar mo であるが shu ston には行われない。この一週間は、ダライ・ラマとその高官はラッサのポタラを留守にするのでポタラの前では何の催しもないのが普通である。(但し、革命後はどうか知らない。)僧院の方でもこの一週間は休暇を楽しむことになっている。

長沢氏が六月三十日―七月八日とせられたのは、七月三十日―八月八日であるべきところの誤をそのまま踏襲したものとしか考えられない。「安居」は仏教の伝統では頗る重要な行事で、この間の一部に相当する六月三十日―七月八日にこのような催物は出来ない。

次に、單なる誤りに当るもののうち主なもの拾つて見よう。

一八一―一九頁に、チベット人は国土を四部に分けるとするが、一般にチベット人は国土を三分することがよく知られている。

即ち、

stod……mñah ris skor gsum (西)  
bar……dBus gTsan ru bshi (中央)

smad……mDo khams sgañ drug (sgañ gsum) (東)

或は、これらを chol kha gsum といつたりする。長沢氏は、<sup>2</sup> 恐らく Bod と Bod chen po という特別の二分法 (Atiqa が mñah ris に来て、彼がそれから赴うとする dBus gTsan と Khams を含めてこれを Bod chen po と云つたが、後世これを誤つて Bod を dBus gTsan, Bod chen po を Khams としたもので、mñah ris は含まれていない。)に依つて、これを各々二分した四分法を特別なものと知らず採つたのであらう。

著者は盛にチャンタン高原と称して、Byan than 周辺とこれを混同しているように思われる。(一〇五、一〇九、一一〇)例えば、二八頁に、ラサから中央アジアをこえてウルがに達する道としてナクチュカ Nag chu kha からツァイダム Tshahi hdam に達する前にチャンタンを通るとしているが、チャンタンの東辺とすることが出来てもチャンタンを通るとは云えない。まして、「中央チベットすなわちウとツァンの大部分は、いわゆるチャンタンであつて、」という規定は無謀なものである。Byan than は gTsan の北部にあり、テングリノール、即ち gNam msho もチャンタン南端に

ある湖(二一)といわねばならぬ。著者が二六頁に述べるようにチャンタンは天候不順のところで、極く少数の遊牧民 *hBrog pa* が、夏季にのみ遊牧するところで、とても、アムド *A mdo* やシャム・シュン *Shan shun* (チャン・チュンド *— 11 —* とは云わぬ。ナリも *mNah ris* ガリ *1109* の誤) とならんで古代国家が成立したところとは(一〇九)普通、チベット学者は考えていない。例えば、蘇毗はチベット語でスムバ *Sum pa* と云ふ、*A mdo* 或は *Khams* の北などがその所在地と考えられている。

吐蕃王朝をラサ王国(一〇七)とするのは、この王朝がヤル・ルン *Yar kluns* 地方からサムエ近辺を本拠としたとされている現在、これを覆す積極的理由がない限り正しくない。当時のラサはこの王朝の夏季住地 *dyar sa* の一つに過ぎなかつたと思われる。

婚姻制度として叔父甥一妻婚、父子一妻婚を挙げる(三四)が、父や叔父(父系)の死後、或は出家後に、子や甥が自分の母系に抵触のないかぎり彼等の妻女を娶ることが出来る制度であつて、兄弟一妻婚と並べて挙げるのは誤りである。

著者が「ダライラマ法王国の実情」として四八頁以下に述べたもののうち、チベット中央政府の構造として示した図式は全く出鱈目なものである。

先づ、地方庁、司法庁、大蔵庁などというものはない。ゾ

ンブンとあるのは *rdzong dpon* 即ち知事のようなもので、ミブン(ミブンではない)とは、*mi dpon* いはば市長のような職である。大蔵庁としてラチャと書いてあるのは *bla phyag* のことらしいが、これはラサの *Jo. khai* (*qPhrul snan*) の中にあるモンラム大祭 *smon lam chen mo* に関する理財事務所であつて、大蔵庁なるものではない。ツィブンの役人は *rtsis dpon* のことで財政庁ではなく *rtsis khai* の役人を指す。一々訂正するより新たに示した方が手早いと思うので以下に必要なものを示して見よう。

先づ組織の序列をいうと、一般に、

*Dalai bla ma bkah gun* (*Dalai bla ma* の父) → *bkah gag* → *rtse yig tshan* とされてゐる。

*bkah gag* とは内閣のようなもので、*bkah blon bshi* とか、*shabs pad bshi* 或は *sa bdag rnam pa bshi* と称せられ、四人の大臣 *blon chen* によつて構成される。その一つは通常、僧によつて占められ、これは *bkah blon bla ma* と云われる。

長沢氏は、ダライ・ラマ十三世によつて新設された *blon chen spyi pa* (一人或は三人) とこの *bkah gag* の *blon chen rnam pa bshi* とを混同して、後者の起源をもつて前者のそれとしている。(五二) 後者の起源に關しては、著者

長沢氏が巻末に挙げた参考図書のうちにある Petech, L.: China and Tibet in the Early 18th Century, Leyden. 1950 が詳細に述べている。因みに、この制度は一七二二年清朝が軍政を解いた後、Shan Khan chen nas bSod namts rgyal po を主班として Na phod pa, Lum pa nas, sByar ra ba の三人とで構成させたのが始まりである。

他方、blon chen spyi pa はダラ・ラマ十三世が清朝などの制度をまねて創設したもので、事実上は一種の名譽職に近いものであった。

bkah gag にいる四大臣には特別の管轄というものはない。

外務 phyi rgyal las khuñ とか、軍事 dmag spyi khan などとも元来あつた省ではない。最近の紀行文などでは六人の bkah blon について語つたものなどあるが、恐らく、元来の四人の大臣に、先に挙げた外務、軍事の大臣を加えて云つてゐるものと思われる。

大蔵省に相当するものは rtsis khan といわれ、そこには三人の rtsis dpon が事務を分担している。

四人の大臣に次ぐ地位として、(数字は員数を示す。)

- a) rtsis dpon 3, b) rtse phyag 1, c) bla phyag 1, d) phog dpon 1.

が挙げられる。

(1)は既に説明した通り。(2)は寺院の経済を司る事務官の長。(3)は hPhrul snan 即ち Jo khan の経済、特に smon lam chen mo 等の経済を主管する役である。(4)の phog dpon は役人の俸給を管理分配するのが職とされる。

この後にくる序列は、

- 1 lHa sa gñer tshan 2
- 2 lHa sa mi dpon 2
- 3 lHa sa gcer dpan 2
- 4 shol sde pa 2

となつてゐる。(1)はラッサの食糧を管理する職、(2)はラッサの市長、(3)はラッサの裁判官である。(4)の shol sde pa は Po ta la のすべ下のラッサ特別区の長である。各地方の長官、即ち rdzon dpon, rdzon sdod とよばれるものはこれらのラッサ四職の下位にある。

長沢氏が、ミブンとかセパンと書いてゐる(五八)のは、夫々(2)と(3)の職名を片仮名で悪く示したもので、ミブン、シニパンとすべきであらう。ただ、ミブンにしても、シニパンにしても、チベット全土の行政や司法に関与するものでなく、ラサのミブンとかシガツニ gñis ka rtse のシニパンという風に、限られた土地に於いて夫々の職責を果すものであつて、同氏のいうような司法省などという大がかりな機構は元来この国にないのである。

内閣に次ぐ序列にありながら、実は、これを凌ぐ権力をもつのが *rise yig tshan* 寺院秘書局で、秘書官四役と *drun yig chen mo bshi* と、これらを統べる長、*spyi skyabs mkhan po* とによりて構成される。(五四)

この *spyi skyabs mkhan po* と共に大きな勢力をもっているのは、*ダライ・ラマ*の側近にある侍従長 *ngron gñer chen mo* であろう。側近にはこの他次の四役がいる。ごつれも隠然たる勢力を占め、重要な地位である。

- 1 *mchod dpon chen mo* 仏事供養係
- 2 *gsol dpon chen mo* 食事係
- 3 *gzims dpon chen mo* 部屋係
- 4 *bla sman pa* 侍医

この他、*ダライ・ラマ*個人の財産を管理する *rise phyag ya*、護衛に当る *gzims hga* などの職もある。

著者は、*ダライ・ラマ*の選衡に関して「*ラサ*にある四ヶ所の大寺院（*ネチェン寺*……）の託宣を仰ぐ。」(五一)としているが、これらの四ヶ寺はいづれも*ラサ*にはない。又、これも大寺院とは云えない *chos skyon* 護法神を祀った *leog* 廟である。 *gNas chuñ* は *hBras spuns* に近く、*チベット*の国事に関する神託を受けるところ、*bsam yas* は *gTsai po* の北岸にあり、*dgah gdon* も *la mo* も*ラサ*にはない。著者がカタカナで示したチベット語には原語の推定しかね

るものがいくつもある。

例えば、刑罰の一としてあげたカングエ(五八)とか、土地の課税単位としてカンガイ(六四)なる語を示しているが、相当するチベット語が不明である。

*ラッサ*の目抜き通りコンバル(五九)とあるのは、バル・コル又はバンコル *bar bkhor* の誤記でなからうか。

四五頁に、*Ch. Bell* の *Shik-re* に関する珍説を紹介しているが、これは *cigarette* がチベット語化した訛に過ぎない。*shik* は「裂く」の意味をも、*gce*, *gje* に似ており、*re* が「魔」を意味する *hdre* に発音が近いため出来た附会の説であるが、説明を誤って逆に伝えたものである。

チベットの古い宗教ボン・ポについて、*rmu-yul*, *rmu thag* の説明をしているが、前者はボン・ポの神国であつて神そのもの(七三)ではない。又、*rmu thag* がしめなは様であると説明した文献は知られていない。*rmu skas* の説明を空飛びと訳すのは(九五)、著者の責任ではないが、はじめで見るところで、一般には *rmu yul* に至る梯子又は階段とされている。

八八頁に、「毎年四月のモンラム祭に巨大なタンカがポタラ宮前面にかけられる…」とあるが、これは正月の *smon lam* ではなく、二月のツォンチ = *tshogs mchod*、俗に「小モンラム」といわれる行事の終りにポタラの外壁にかけ



られる *gos skru* 工・ク、一種のタビスリのことであろう。八九頁の写真はそれで、タンカとは云わない。

一三五頁に仏教の後期伝播についての説明を見るが、一般に、多くの若者をインドに送つて法を求めさせた最初の王は、ユルレではなく、その兄 *Ston ne* ソンゲ即ち、*Iha bla ma Ye ges hod* であつたとわれている。彼は *mTho lhi* トリンの *dPal gyi lha khañ* 建立の施主をした人である。この寺には彼が印度へ送つた二十一人の若者中の随一であつた偉大な翻譯僧 *Rin chen bzai po* が住持した。

長沢氏は、最近の研究によると *Atiṣa* も墮落した仏教を扱めたとしているが、タントラ仏教のテキストの内容とそれの修法に対する関係、更に、これらと僧が在俗の信者に勧める事柄とのつながりを全く同一のものと無責任に速断した所論を受け入れたものと考えられる。

又、例えば、*yab yun* によつて象徴される事柄には、勿論、ヒンズー教の *śakti* の影響を否定できないが、これとかれの間の距りを説明するか、或は、少くとも相違のあることに言及するのがこの種の書物に於ける著者の義務ではなかつたらうか。

*Atiṣa* は *upāya* と *prajñā* の結合 (*yab yun* によつて象徴される) を強調したが、*shyor ba*, *sgrol ba* も共に凡僧の実践すべきことでないと言明している。後期の大乗仏教

が真剣にとり組んだ諸問題の一つを、今日尚お充分に説明されていないままに、墮落した仏教という簡単な表現で片づけられるのは差し控えたいことである。

著者は、ニゲマバと二二六頁に記しているが、*rin ma ba* のことなら、七七頁に書いてあるようにニンマとするのがよい。

ダライ・ラマ五世以後の歴史は、いろいろな意味で今日のチベットに直接つながっている。従つて、発言も慎重にしたものである。

五世ダライ・ラマの時、*Gu gri han* (固始汗、顧実汗) に援を乞うたのは、当時の黄教派の政治的実権を握つていた *bsod nams rab brtan* (*chos rgyel*) で、汗がまだ青海に一族と共に移住する前のことであつた。勿論、当初は汗が *dge lugs pa* の確とした信者であつたわけでない。(一四七)

又、汗が *sde pa gTsar pa* 即ち *Karma bstan skyon dhan po* を亡した後のこととして、「東チベットは自己の支配下に置き、中央チベットはダライ・ラマに、西チベットはパンチュン・ラマに贈与した。」(一四八)と述べられているが、何によつたのであろうか。チベットの文献によれば、一六四二年三月十五日、汗はチベット全土の主権をダライ・ラマ一人に献上した。」とあり、当時、尚お今日のようなパンチュン・ラマとしての地位が確立されていなかった当の *blo*

bzan chos kyi reyal mtshan の自伝にもこれに相応する記述は一語も含まれていない。

gTsañ の一部はもとめて bkra gis luh po の莊園であつたが、Pan chen bla ma をして分掌せしめたのは、十八世紀に入つてからの清朝の政策で、Pan chen bla ma II blo bzai ye ges のときに始る。

第一世の名は、ロサン・チョエジエではなく、ロサン・チョエキ・ゲンツェンでなくてはならぬ。ダライ・ラマ五世の歿年は一六八二年であつて一六七七年（一五二）ではない。ジェンガリヤの dGah Idan Bogoshtu hañ が sde srid Sain rgyas rgya mtsho (デセとは宰相のことである。従つて、宰相デセ・サンゲ・ギヤムツォー六四頁—とは云わぬ) と同盟した。然し、「青海ホシヨット部を襲つて大敗させ、チベットからホシヨット部の勢力を一掃した。」とあるが、右に相当する事実は全然ない。

チベットからホシヨットの勢力が一掃された(?) のは、ずつと後のことで、勿論、sde srid (第巴) も dGah Idan (噶爾旦) も死んだ後の一七二八年に当る。この時、dGah Idan の甥 Tshe dban rab bstan がホシヨットの lHa bzai khañ を殺した。いずれも、先に示し、又長沢氏が参考文献としてゐる Petech 教授の名著にくわしく述べられてゐる。

以上は本書の前半に見られた誤である。

初めにも述べた通り、この書物は、もう一步の努力と慎重さが加わつていたら、「第三の眼」が荒唐無稽なものであることに端を発して斯学に資する入門書を書こうとした著者の意図も或は、達せられたのではないかと思われるが、右のように、可成り大事な点で難が多い。然し、一応古代から現代に至る歴史、其の他チベットに関する大概のことがらについての記述が含まれているので便利である。

(校倉書房刊、昭和三十九年九月、三一〇頁)

北京大学中国語言文学系語言研究室編

## 漢語方言詞匯

藤 堂 明 保

### 一、語イの対照表

一九六二年に『漢語方言字、滙』(文字改革出版社)が出版されたが、それはおもな親字の各方言における発音を示したもので、いわば、カールグレン氏の方言字イの現代版であつた。ところが、こんど出版されたこの書は、全く前者と性質が異なつてゐる。その書名の示すとおり、これは各方言にお